
3匹におまかせ

東風こち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

3匹におまかせ

【Zコード】

Z9745E

【作者名】

東風こじ

【あらすじ】

この何の変哲も無い平凡な日本に暮らしている一人の青年が、異世界の、しかも一見何の関わりもない事件に巻き込まれることに…

第一話 前兆

- ・まずは今回の登場人物の紹介だつたりする。

赤坂 薫（19才、 ）

無職で、バイトばかりやつてゐる。ちょっと冴えない容姿であるが、

「将来は声優になつてやる」という希望を持つてゐる。とくに特技とい

つたものはないが、どのようなことにも顔を突っ込みたがり、ど

のよう

なことにも挑戦してしまつといった困った性格である。

動物が好きで、今回の事件もその動物好きが災いして起つてゐる。

第一話 前兆

赤坂薫は、腕を組み物思いにふけりながら公園を歩いていた。

薫は今年の3月にに高校を卒業したばかりの、それでいて大学にも進学せず、かといって専門学校にも行かずにずっとバイトをやつていた。

薫に言わせれば、「大学に行つたって、なにをするつていうんだ」と言つ

ことだが、実は大学に行けるほどの成績を残せなかつたこともあり、

大学進学を断念していた。そのうちに、専門学校への誘いや就職への勧めもあつた

が、薫はきつぱりと断つていた。「自分の進みたい道がはつきりしなこうち

は何をやっても無駄だよ」というのが理由だった。

そして、薫が高校を卒業して早くも10ヶ月が過ぎ去りつとしている1-2

月の鳥取県米子市。外は風が冷たくなっている時期である。団地のすぐ脇にある公園には寒いからかどうか、遊んでいる子供の姿もまばらだった。といつても、日本の公園は狭くて遊びにくいのも当然のことか

もしかれないな、と思う薫だった。

しかし、薫はそんなことにかまう余裕がなかつたのかもしない。

『どうしたというのだろうか?』 薫は思つた。

何がが変だつた。しかし、それが何なのかは分からぬ。分からぬいから

不安になる。ただの気の迷いかな?とも思つた。

ふと、目の前に犬がいた。柴犬だつた。どうして今まで気が付かなかつた

のか・・・。たぶん自分の思いに沈んでいたからだろひ、薫はそう思つた。

「クゥーン、クゥーン」

犬は薫の足元で鳴いていた。どうやらお腹をすかせているらしかつた。

「おー、よしよし・・・ん、どうした?」

しかし犬は、何も言わない。ただ鳴いているだけである。

「飼い主はいないのかな?・・・まあいいや、来いよ」

薫は歩きだした。犬は、少し離れて付いてきていた。

「ちょっと待つてな」

薫は、につこりしながら犬にそつまつと、駄菓子屋『河野屋』に入つて行つた。そこでスナック菓子を買つ。

「やっぱり駄菓子屋にはこんなものしかないか」

そして薫が河野屋から出てきた時、犬は姿を消していた。

「お？あれ・・・どこへ行つたんだ？」

しかし、薫の周りには誰もいなかつた。

「何処にいつたんだ？」

しかし、薫はすぐに、あの犬は飼い主の元に戻つたんだなと思つた。

「まあ、あいつにも飼い主がいるんだよな・・・」

薫は、ちょっと淋しくなつたように呟いて、虚しく空を見上げる。しかし、薫はその時妙な事に気が付いた。

「空の色つてこんなだつたっけ？」

確かに、空の色が普段なら青いはずだが、紫色に見えた。

薫は目をこすつて、もう一度空をよく見た。

「ん？やつぱり田の錯覚だよな。空が紫色な訳はないよな。ははは・

・・・

笑つて誤魔化す薫だつた。

続く・・・

第一話 前兆（後書き）

とつあえずで作成している話ですが
長くなりそうなので、連載で掲載
することにしました
末永くおつきあいくださー

第一話 眼（前書き）

「これは違う世界でも、また何かが始まろうとしている。いや、既に始まっているのかもしれない……。

第一話 罷

- ・まずは今回の登場人物の紹介だつたりする。

ピック・カムラッシュ（37才、 ）

物静かな狩人である。狩人といえどもこの者の剣の技術には目を見張

るものがある。しかし、どういう訳か剣よりも飛び道具を使いこなす。

いつも冷静沈着で、動搖を見せることもないくらいに鉄の心を持つて

いる。

狩人であるにもかかわらず、実は宫廷騎士団で「隊を率いている。

第二話 罷

ピック・カムラッシュは、囮まれていた。

「くそつ、不覚をとつてしまつたか・・・」

しかし、そう言つたところで状況は一向に良くなるわけではないことは分かつていた。

こんな状況になつてしまつた元々は、ピックがカルミール国王、ライデル

ク11世から、最近ストームフォレストに出没する妖魔を退治してほしいと

の要請を受けて、少數の精銳を引き連れて出発したことに始まる。

カルミール王国の王都ミンテスを出発し、ストームフォレストに

至る道の

途中で妖魔との最初の遭遇をし、撃退した。そして、ストームフォレストに

到着するまでは何事もなかつたものの、森に分け入つてからはさんざんな目

に遇つていた。1人、又1人と行方不明になつた。ピックはそれも妖魔の仕業だらうと皆に言い、単独行動を禁止した。

にもかかわらず、今度は2人組で行動していた仲間も消えてしまつた。

森の道もだんだんと険しくなり、最後には獸道すらなくなつてしまっていた。

それでも、ピックは諦めずに妖魔の巣窟を探した。

しかし、ピック達の搜索も1日毎に限界に近付きつつあった。その時の人

数はもう3人であった。そして夜、ピック達は見張りを立てていたにもかかわらず襲われてしまい、なす術なく逃げ出してきたのだった。ところが、ピ

ックは一人になつてしまい、妖魔の軍団に追い詰められていた。

仲間がどうなつたのかを確かめることもできず、自分の無力さを痛切に思

い知らされたピックであった。

周囲には猿のような姿の、しかし猿よりも獰猛で奇形な種族のゴブリン

が、手に棒きれを持って、今にも襲いかかるうとしていた。

頼みの武器も、こんなに多数の敵を相手に、しかも接近戦ではな

おさら意

味を持たない。彼の武器はロングボウであった。飛び道具では今の状況を変

えることは難しい。しかしそれ以外にも彼は武器をちゃんと持っていたが、

短剣ではこの群がるように現われたゴブリンには立ち向かえない。
彼は、優れた戦闘の技術を持っていたし、「ゴブリンなど恐れたこともない。

それでもこの数の差はいかんともしがたかった。しかも彼は、致命傷にはなつてないものの大小様々な傷を負っていた。

「こんなところで・・・」

しかしそう言いながらも、ピックは諦めていなかつた。どうにかして逃げ

出せる手立ては、と周りをじっくりと見回す。

何があるはずだ、何か・・・内心で思いを巡らしているところへ、突然

体中の力が抜けていく感覚を味わつていた。

「ん？ これは・・・」

どうやら、ピックに魔法がかけられていいようだつた。

「ま、まさかそんなはずは・・・しかし・・・くそつ！」

ピックは内心の疑惑を振り払つかのように首を振り、目の前をじつと見据

えた。

ゴブリンはしばらく戸惑つてゐるようだつたが、ピックは「ゴブリ

ン達など

見てはいなかつた。ピックが見ていたのは、その後ろにいるはずの人物であつた。

「隠れてても分かつてゐるんだ、出てこいよ」

ピックの呼び掛けに応じてか、1人の人物がゴブリン達の後ろ、ちょうど

ピックの見ていた場所から現われた。

「ふつ、いつものごとくに勘の鋭い人ですね」

その人物はフード付きのマントを身につけており、顔には凝った

模様の施

された仮面が付けられていて素顔は見えない。

「ふん、えらくなつたものだな。グレツ・バディースよ」

続く・・・

第一話 眠（後書き）

こんな感じの執筆ペースならなんとか連載でも投稿できるので、これからも数日感覚で投稿しますので、よろしくお願いします～

第三話 魔法使い（前書き）

いよいよ異世界を印象付けるような不思議な人物が行動を起こす。

第三話 魔法使い

- ・まずは今回の登場人物の紹介だつたりする。

グレッツ・バディース（ ）

魔法使い。とりあえず名前だけは有名であるが、謎が多いためにいろ

いろな噂が立つことになる。何かの研究をしているらしいが、何の目的でどのようなことをしているのかは不明。

ペックとはただの知合い以上の仲であるらしいが・・・。

第三話 魔法使い

グレッツ・バディース、その名前を聞いて知らないものはいないと言つくら

いに有名な人物で、魔法使いである。

魔法使い、それはこの世界では羨望の眼差しで見られるべき存在で、一般

の人達ではできないようなことをやつてのける者達のことである。

グレッツ

はその魔法使いであり、しかも特に高位の術を行使することができますのである。

「誉めてもうえるとは光榮ですな、ふつ」

ピックは、渋い表情をますます曇らせていた。ゴブリンという種族は、人

間に対しては威嚇的な態度を取るか、悪ければ攻撃を仕掛けてくる。

グレッジは、ビーハヤリヤリコンたちを操作していくよう見えた。

これも

魔法のなせる技であろうか。

「けつ、誓めてなんかねえんだよ」

「まあとにかく、今日はあなたにお願いがあつてここに来たのですから」

「俺に頼みだと？」

ピックは怪訝な顔でグレッジを見た。

「そうです、あなたにある場所まで行つてもらいたいのです」

「ふん、俺がそんな話に乗ると思ってるのか」

「思つてますとも。当然でしょ？、これだけの『アブリーン』がいる」とですし

ね

グレッジは勝ち誇ったように微笑み、ピッケルを見つめる。

ピックはグレッジを睨み付ける。あたかも、睨むだけで石化せること

できるバジリスクのよう。

「うりやーつ！！」

突然、ピックは動いた。あれほどにダメージを受け、なおかつグレッジの

魔法が効いてこないはずのピックが、しかもその動きの素早いのは、『アブリーン』が身動きするにもできないくらいに速く、神速と言つてもここへらいであります

た。

ピックの目標は、当然グレッジである。

「でりやーつ！」

ピックの必殺の一撃がグレッジに向かって繰り出される……そう思えた瞬間、

「う、ぐ・・・・ぐあつ・・・・」このやうに

グレッツの身の周りから電撃が走り、ピックは氣絶していた。

「残念でしたね。あなたは私の恐れを、忘れてしまっていたのです

ね」

グレッツは微笑みながら言つた。しかしその笑みは冷ややかだつた。

続く・・・

第三話 魔法使い（後書き）

この話でもまだ序章に過ぎないですね
最後まで続けられるか心配ですが、
頑張つて投稿します(^ - ^) ; ; ;

第四話 奇妙な再会（前書き）

この話に登場する主人公、赤坂薫。

これからようやく彼の周りで何かが動き出す・・・。

第四話 奇妙な再会

今回は登場人物紹介はありません
では早速本編です・・・

田曜田、薰はこの田ふらりと散歩に出たのだが、それは昨日の夜に見た夢

が気になつて仕方がなかつたからだ。気になるといつても、それがどんな夢

だつたのか、何が起こつたのか薰は思い出せないのだつたが・・・。
とにかく薰は、バスに乗り駅に出る。駅から電車に乗る。

席に座り、ぼーっと外を眺める。電車が動きだし、外は町の景色から次第

に海の見える景色へと変わる。青い空がだんだんと曇り空になつてきている。

そして、何時間たつたのか、どこへ向かつているのかも分からなりままでいる。

電車は鳥取駅に着いていた。

駅から出ると、真つすぐに海の方に向かつて歩いた。

誰なんだろう、私を呼ぶのは？・・・いや、何なんだこの感じは・
・・。

薰は家を出る前から何かに呼ばれていたように、ずっとある場所に向かつていたのだった。しかも無意識にである。

その場所とは、薰は意識していなかつたのかもしれないが砂丘であった。

しかし駅から砂丘までは、直線距離でも5キロはある。結局そこそこ回り着い

たのは、駅を出てから一時間三十分を軽く回つてからの「」だったので。

「うわあー、やっぱり海はすごいなー」

海が見えたとたんに薫は、自分の物思いも断ち切つて海に向かつて駆け出していた。

「あれっ、あの犬は・・・この間の・・・」

不意に薫の目の端に、この前公園で出会つた犬が映つていた。し

かもそい

つは、薫の方を見ているようだつた。薫がその犬の方に寄つていくと、犬は

急に駆け出していつた。

「おい、どうしたんだ?」

犬はちょっと離れてから、また止まつて薫の方を見ていた。どうやらつい

てこいと言つてゐるよう薫には思えた。

「行つてみるか

そつと独り言のようにつぶやいて、薫は歩きだす。犬もまた歩きだす。

「おまえ、名前はなんて言うんだ?」

薫は相手が答えないといつても質問せずにいられなかつた。しかし、意外にも答えは帰つてきた。

『ワタシノナハ、ロデ・・・』

犬はこちらを向くとそう言つた・・・ように見えたが、実は薫の精神に直

接語りかけていたのである。

「お、おまえ・・・話せるのか?いや・・・まさか・・・うーん」

薫は驚いていた。犬と話をすることが薫にとっては初めての経験であり、

しかも日本語で話しているのである。薫は、言ひようのない不自然

さを覚え

ながらも、今まで呼び掛けていたものの正体が分かつたような気がした。

『ハ、ハナセルサ』

しかしローデは話すのが難しいように、たどたどしく喋っている。

『オマエヲサガシテイタ、ドウカタスケテホシイ』

薫はローデと並んで走りながら、怪訝そうにローデの方を見た。

「助けるって、どういうことなんだ？」

『ソ、ソレハ、アトデハナス。イマハワタシニツイテキテクレ』

薫は迷った。しかしローデの瞳を見ていると、それは薫にも関係のある重要な

なことだと感じられた。ローデはさうがるような田で薫をじっと見つめていた。

「分かったよ。話は後で聞く」

そして、薫はローデについて砂丘の端の方に向った。

続く・・・

第五話 魔囚（魔物や）

目に落ちたピック。

これからどうなるのか・・・。

第五話 虜囚

- ・まずは今回の登場人物の紹介だつたりする。

ロデリック2世（16才、）

国王の息子にして騎士である。人一倍優れた直感の持ち主。外見はあまりぱつとしないように見えるが、右目の人下から左の頬まで

一直線に深い傷が走っており、凄味を見せている。

もともと性格は血氣盛んで先走りやすいのだが、ひとつのことに執着

しないことから飽きっぽい性格といえる。

第五話 虜囚

「……ん、ここは……うつ…」

ピックは、気が付くと周りを見回してみた。そして、起き上がろうとした

とき、体が何かに固定されて動けなくなっていた。手足には鉄の枷がはめら

れており、ピックは衣服以外の装備を取り上げられていた。

しかもピックは怪我をしているが、手当ではされなかつたようだ。体中の

傷がズキズキと痛んだ。特に、グレッツから受けた傷はひどかつたようだ。

ピックの視界が効く範囲で周りを見回してみると、そこはひづやら牢屋か

何かの部屋のようで、床は石畳になつており部屋の隅に何かの道具

らしいも

のが並べられている。部屋自体は松明がかかっていて、あまり明るくなかつ

たが、見えないくらいに暗くはなかつた。

この部屋にはピックの装備はなさそうだった。

「くそつ・・・せめて動ければ・・・」

手足を動かそうと試みるが、枷はしっかりと固定されていて動かない。逆

に下手をすれば血が止まってしまうくらいに絞めてあり、感覚がなくなりつつある。

その時不意に部屋の扉が開いて数人の人が入ってきた。部屋の入り口付近

は暗がりであまりよく見えないが、足音や話し声で4、5人だとピックは判斷した。

「ここにいるのが実験体3号です」

「どうやらピックのことを言つてゐるらしかつた。

「おまえ達には苦労をかけたな、もう戻つてもいいぞ」

「どうやら今のが隊長だろう。部下に対して言葉をかけてい

る「それでは失礼します」

部下の1人と思われる人物がそう言つと、がちやがちやといつ鎧の音をたてながら部屋から出ていったようだ。

隊長と思われる人物が、部屋のなかに入つてくる。

「おお、もう気が付いているようだな。調子はどうだね?」

ピックは、その人物を見たとたんに驚愕していた。

「これは何の真似だ? 大体、どうしておまえがこんな所にいるんだ?」

「こんな所だと、おまえはここがどこだか分かつてゐるのか?」

その人物、ローテリックは蔑んだ目でピックを見ていた。

ローテリック、この人物はカルミール王国の王子であり、したがつてあのラ

イデルク11世の子供なのである。

ピックはローテリックのことをよく知つており、ところのもピックがローテリ

ックの武術の先生であつたからである。しかしピックは、この時点でローテリックがいつも彼でないことを察知し

ていた。まず目付きが違つていた。

ローテリックは、こんなに人を見下したような態度を取ることはなく、いつ

も澄んだ瞳をしていたはずだ、そうピックは思つた。

「どうやら知らないようだな、だつたら教えてやるよ。」
「」
ミントス

の王城にある地下牢だよ、くくく」

ローテリックの言葉に嫌悪感を感じながら、ピックは考えを巡らせていた。

「どうした、俺の言つたことがそんなにショックだったか？まあ無理もない

な、かつておまえは」
「」
王のために国を守つていたのだからな」

ピックは黙つたまま何も答えようとほしなかつた。まるでローテリ

ックの言

つたことの意味を推し量りうるかのようにな……。

「まあすぐに樂にしてやるわ。その前にひょっと聞きたいことがあるんだが

・・・

ローテリックはくくくと低く笑いの声を漏らしながら、

「盾はどうにある？」

と聞きつつ、部屋の隅に向かつていった。そこには先程ピックが

見たこの

部屋の道具があつた。おやじくはそれが拷問の道具だとピックは初めて気付いた。

「盾だと？」

今度はピックが逆に聞き返す番であった。

「そうだよ、おまえは知っているはずだ。まあ、どこにあるのか言つてもら

お」

「盾って言つたって、何の盾なんだよ？」

「おまえは“霧の盾”を知らないのか？いや、そんなはずはない」
ピックは霧の盾について聞いたことがあつた。霧の盾とは伝説の

武具で力

ルミール王家に伝わる家宝だと聞く。その盾にビのよつな能力があるのかは

王家の者にしか分からないと言われている。

「そうか知らないのか、だつたらもう用はない」

そう言いつつ、ローテリックは部屋の隅にあつた道具を幾つか手にしていた。

「そんなことよつ、これから俺を殴りこなしちうんだ？」
ピックが言った。

「それは、後の奴らに任せることにしておるんでな」

ローテリックが不敵な笑みを浮かべる。

ピックは今、袋小路に追い詰められたネズミのような気分になつていた。

続く・・・

第五話 魔囚（後書き）

ちよつと間があいてしまいました。
といつあえずなんとか5話までいきつたることが出来ました。

第六話　侵入者（前書き）

危険な状況に追い込まれたピック。
このあと一体何が起こるのか？

第六話　侵入者

トン、トンと部屋の扉がノックされる。

「入れ」

ロデリックが短く言うと、扉が開いた。そして、ロデリックが開いた扉の方を振り返る。しかしそこには、ロデリックの知らない人物が立っていたの

だろう。ロデリックはそちらの方をまじまじと見ている。

その人物は背が高く、外見はフード付きのマントに身を包んでいるため分からぬがかなりがつちりとした体格の持ち主であることだけは確かである。

その人物は、扉が開くと同時に中に躍り込んでいた。そして、その勢いのままロデリックに手刀を叩き込んでいた。

「な、なんだおまえは・・・・ぐ、ぐあ！」

ロデリックは一瞬、自分の身に何が起こったのかも分からぬまま氣絶していった。

ピックは、その光景を目にしたときに驚いていた。あのロデリックが手刀でリックの一撃で倒れてしまったほどに弱くはなかつたはずだった。しかしロデリックを倒せる程の腕を持つものとなれば、ピックも油断がならないと思っていた。

「・・・・・」

ピックは、声もなくそちらの方を見ていた。するとその人物はピックの方

に寄ってきて、剣をすりと抜いた。抜き放たれた剣が不気味に光る。

「じゃあ、やるわよ」

それは紛れもなく女の声であった。しかしピックはその声をビックで聞いた

たことがあった。

そんなことを思つてゐるうちに、その人物は剣を上段に構える。ここでやられるのか・・・、ピックはそう思いながらその人物をじっと見

じっと見

据えていた。

「はあーっ！」

氣合いと共に、剣が振り下ろされる。

「ぐあーっ！」

ピックは、剣が振り下ろされると同時に叫んでいた。

続く・・・

第六話　侵入者（後書き）

ついあえずは書き擱めた話がまた出でてしましました。
この後は新たに書き続けますが、しばらく時間がかかると思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9745e/>

3匹におまかせ

2010年12月15日02時38分発行